

2015年12月10-11日 米元飛行士捕虜2名の墜落地点再訪と市民交流会

「捕虜 日米の対話」東京代表：伊吹由歌子

はじめに

千葉県印西市にパラシュート降下したスコット・ダウニング Scott Downing さん（96歳）と埼玉県三郷市に降下したドナルド・ライアン Donald Ryan さん（93歳）、お二人の旅は、10日、群馬県秋妻にある清岩寺での記念碑献花、ライアンさんの墜落現場である埼玉県三郷市訪問と地元民との交流。柏市に一泊。11日にダウニングさん墜落現場の千葉県印西市訪問、撃墜米飛行士の研究者・新井 勲氏によるパワー・ポイント講演と市民との交流という内容で行われた。POW 研究会、および新井勲さん提出の情報と案をもとに、外務省北米局第一課により準備され主催された。

12月10日 午前：群馬県秋妻 清岩寺

曹洞宗清岩寺の境内に 2013年3月に設置された記念碑は、2機の B29（「Slick's Chicks」と「Deaner Boy」）接触墜落による23名の犠牲者を覚え追悼する碑。1945年2月10日、130機編成でテニアンを飛び立ち群馬県太田市の中島飛行機製作所爆撃ミッションで飛来した 505 爆撃部隊。スコット・ダウニングさんも参加していた。爆撃手だった彼の定位置は飛行機の鼻づら、操縦士と副操縦士のすぐ前である。除幕式にはアメリカから遺族である 505 爆撃部隊ヒストリアン・Nancy Samp さんら4人が出席した。



清岩寺の2つの碑を訪ねた一行

隣に建つ碑は1945年2月16日、米空母バンカーヒル (USS Bunker Hill) を飛び立ち足利市の畑に撃墜されたグラマン機3名の乗組員を覚えるもので、彼らの慰霊碑も2015年3月16日、同じく新井さんの調査、清岩寺ご住職・木崎信雄師と檀家のみなさんの支持と浄財により、清岩寺境内に並んで建立された。新井さんが情報を得た *Danger's Hour : The Story of The USS Bunker Hill and the Kamikaze Pilot Who Crippled Her* の著者・Maxwell Taylor Kennedy さんが娘さんと共に出席、従姉にあたる Carolyn Kennedy 駐日米大使のメッセージも碑となっている。

碑の前に車椅子を並べて新井さんによる説明が行われ、Bret Fisk さんが通訳した。お2人が、息子、



B29 碑とダウニングさん

夫人にそれぞれ介助されつつ、二つの碑に献花。その後、2013年の除幕式の写真が飾られた記念館で腰を下ろしお茶をいただきつつ、ゆっくりと歓談、集まった報道陣の質問にも答える時を持った。

清岩寺の意義ある



グラマン碑とライアンさん

二つの碑と、駐日米大使の平和を望むメッセージ。これは民間人研究者・新井 勲さんのライフ・ワークと言うべき長年の献身的なリサーチと、新井さんの問い合わせに応えた日米の研究者・関係者たちの協力の成果が結実したものである。1944年4月、10歳だった新井さんは家族とともに東京の空襲を逃れて静岡県に疎開したが、その翌年6月19日、B291機が撃墜され、河の土手に虫の息で横たわる飛行士を彼は目撃した。そのことが忘れられず、新井さんは撃墜された米機のクルーに関する調査を始めた。異国で命を落した若い米飛行士ら。愛する者を戦火のなかに失い、その最後を知るすべもない遺族への想いが新井さんを突き動かし、たゆみなく足を運んで地元住民との信頼関係を築きあげ、情報を得ていった。

Slick's Chicks と Deaner Boy と名付けられた2機の接触墜落事故は新井夫人の郷里の近くだという。戦時中は厳しい国家統制が敷かれ、戦況を記録する写真撮影などは見つければ警察や憲兵への通報、投獄につながった。それを承知で墜落状況を撮影、数枚の写真に記録した人がいた。彼はそれを隠して保管し、死の直前、友人に預けて保管を依頼した。撮影者の夫人は今年100歳になるが、2013年の記念碑除幕に出席して来日した遺族らと面会した。国境を自由に超える新井さんの人間としての真情、それが発掘した一般人の勇氣ある行為、真実の継承への信念と努力の一例である。

戦争を始める国の指導者たち、戦場に送られる若者たち。戦争プロパガンダに洗脳され踊らされる普通の人々。当時の敵と味方がいま、出会い、ともに平和に感謝し、二度と戦争はあってはならないと願いを共有する。それぞれが持つ苦い体験を超えて、勇氣ある誠実な出会いが実現した。

午後：ドナルド・ライアンさんの墜落地点：埼玉県三郷市訪問

ライアンさんは現在、フロリダ州シブリングに住み、エレナ夫人と来日した。出身はミシガン州。1942年11月16日、米陸軍部航空隊に入隊。基礎的訓練の後、1943年8月B29初の訓練生の一員としてカンサス州でトレーニング。1944年1月第20爆撃集団の468爆撃隊の一員としてインド、西ベンガルのカラグプルにあったカライクンダ米空軍駐屯地に駐留。インドに4か所あった米基地のひとつである。16回のミッションは主として中国内の日本軍爆撃で、ときにはヒマラヤを超えて中国戦線へのガソリン、爆弾を運んだり、バンコク、シンガポール、スマトラの鉄道やドックの爆撃。一度は八幡製鉄所爆撃にも参加した。テニアンを米軍が占領後、ここを拠点としての日本爆撃が可能となり、1945年4月テニアンに派遣された。ライアンさんにとっては2回目の日本空爆ミッションは、5月25日夜から26日にかけての東京山の手爆撃だった。乗機は数機の日本軍機に攻撃され墜落、3人は墜死した。ライアンさんは、3人は日本軍に捕まるより機とともに墜死の道を選んだのだろう、と言われる。

1945年3月9日の深夜から10日早朝の東京大空襲を指揮したカーティス・ルメイ将軍は1944年8月から第20爆撃集団司令官としてカライクンダにおり、1945年1月テニアンに移っている。ちなみに、今回の来日中、ライアンさんは優しく愛らしいエレナ夫人に付き添われ穏やかで家族的雰囲気漂わせていた。しかし、日本到着の翌日、ロビーで全員が顔をそろえた際、「ルメイは戦争を終わらせたヒーローだ」と言うハンリーさんに対し、「I hate LeMay (僕はルメイが大嫌いです)」と即座に静かに応答され、立場の違いを鮮明にされたのが印象的だった。

ライアンさんは1945年5月26日朝、機の墜落地点から100メートルほどの農家の垣根付近で捕えられた。地元の憲兵隊員は、ミシガン大学に在籍したことがあると言い、ライアンさんに向けて、ロシア

ン・ルーレットをしながら訊問したという。また製材所へ連れて行って木棺におしこめようとしたり、製材機のような刃に押し付けようとしたりした。まもなく東京からきた憲兵に引き渡され、(無差別爆撃をする飛行士である)お前は「特殊捕虜」であり捕虜としての待遇を受ける資格はないと告げられた。東京憲兵隊司令部では6畳ほどの房に16人の他の捕虜とともに押し込められた。すぐに蚤、虱で皆の皮膚は吹き出物で覆われ化膿した。絶え間ない殴打、餓え、闇、不衛生な汚れ、看守による行き当たりばつりの残酷な仕打ちと脱水症状は、人間性をも脅かし、士気のうえでも、試練だった。重度のやけどを負った飛行士2名が更に追加で押し込まれ、長時間 苦しみつゆつくりと死んでいく彼らを見届けた。8月15日、大森捕虜収容所へ移送。その途中、飛行士たちは東京湾につれてゆかれて 水浴びをさせられた。大森収容所でも、「特殊捕虜」たちは他の捕虜たちとは別の棟に入れられたが、ここでは話すこともでき、入浴もできた。8月29日、155人のB29飛行士を含む500人以上の大森収容所捕虜は米軍により、日本国内で最初に解放される捕虜グループとなった。ハワイまで病院船・ベネヴォレンス号で手当てを受け、その後シカゴの退役軍人病院で治療を受けた後、陸軍航空隊を1946年に除隊した。故郷のカラマズーで弟と共にトラック・リース業を営みドライブ・インも経営した。最初の結婚で5人の子供に恵まれ、現在のエレナ夫人にも死別した夫とのあいだに4人の子供がいる。

12月10日、2時ごろ、埼玉県三郷市のバス駐車場に着く。ここがライアンさんが後部射撃手として乗務したB29の墜落地点である。今回の訪問は、三郷市役所が全面的に尽力してくださり、目撃者も2名見つけて、お2人は市職員のお2人と共にこの墜落地点で迎えてくださった。

おひとりは当時18歳だった女性で市役所に勤務しておられた。もう1人は男性で当時15歳、墜落地点には物珍しさから、毎日のように通いましたよ、と言われる。金属製品に事欠いていた当時、人々がいろいろな破片を持って帰り、加工して掃除用や農具など様々な道具にした。やがてすっかりなくなってしまったそうだ。そこから古いお寺の墓地にゆき、墜死したひとりが戦後まで仮埋葬された地を訪れる。古来から仏像とその堂がある地点で、その仏像はいまもその地に立っている。夕暮れ近くなり、現市長が住職を務める別のお寺へゆく、



一行を迎える市職員と当時の目撃者



現在はバス駐車場となっている墜落地

そこに他の2体が仮埋葬されていた。住職夫人と檀家の方々から暖かい茶菓の接待に預かり、しばらくの時間を歓談した。B29撃墜は、現市長の父上が住職だった



仏堂までの敷石の左に1遺体が仮埋葬された。



市長が住職を務める寺にて茶菓の接待

戦時中のことだが、父上も市長を3期務められ、現市長も現在3期目に入られている。

ライアンさんには Bret Fisk さんが通訳として付き添ってくださり、英語でいろいろ率直な話も出たことと思う。翌朝、「墜落地点の三郷に来て、お気持ちはいかがですか？」と伺うと、「地元の人たちがとても暖かく、本当に来て良かった。この機会を作ってくれて有難う」と力を込めて握手して下さった。

12月11日 千葉県印西市市長表敬／スコット・ダウニングさんの墜落現場・遺体仮埋葬の寺での供養

8時半に昨日と同じ9人乗りのバンで柏を出発。千葉県印西市のスコット・ダウニングさん墜落地点に向かう。シアトルのボーイング社・B17爆撃機の制作ラインで働いていたスコットさんは、1942年9月に陸軍航空隊に入隊、1943年2月に召集され基礎訓練の後、見習い士官コース、射撃手学校へ派遣され、1944年6月、少尉としてネブラスカの505爆撃部隊・B29機の訓練に送られた。1944年12月半ば、第20爆撃集団・505爆撃部隊・第313航空団・482爆撃小隊所属の新しいB29乗組員としてテニアンに派遣された。爆撃、機雷敷設の任務が1945年1月29日に開始された。彼が爆撃手を務めるB29はメアリー・アン二世号(Mary Ann II)と命名されていた。ダウニングさんにとって20回目のミッションは5月25日深夜から26日早朝の東京山の手爆撃、新井さんによれば東京の最後の大々的な空襲だった。爆弾を投下した帰途に、現在の千葉県印西市で墜落され3人が命を落した。

まず印西市の板倉正直市長を表敬訪問。市長以下、支庁の方々こぞって迎えてくださる。これから市長みずからダウニングさんと墜落地点、遺体仮埋葬地などに同行してくださる。今回、新井さんの印西市実地調査により判明したことがある。13年前、まだ市議会議員のころに、板垣氏はB29墜落事故に関心を持ち、同機を撃ち落とした日本軍パイロットを探し当て、インタビューを



後列左からブレット・フィスクさん、天台宗泉倉寺・一島正真師、板倉正直印西市市長。前列左からダウニングさん父子、ライアンさん夫妻。

ビデオに収めておられた。板垣市長の父上は通訳としてひとりの乗員訊問に立ち合い、「アメリカが勝つ。」

と所信を述べた際、抜刀した憲兵に微動もせぬ態度に感動した。「父は医師だと言ったそうだが、この乗員に心当たりはありますか？」と聞く市長。しかし、ダウニングさんに心当たりはなかった。後述する一島師は米大学で2年仏教を講義され、大正大名誉教授である。

墜落地点へ行く途中、戸神墓地の脇を通る。3人のうちClarence Ballさんの遺体はここに仮埋葬された。なお先へ進む。墜落地点は、畑や農具小屋、竹藪など当時と変わら



戸神墓地

ない。この日は前夜から大雨となっていたが、バンで行かれる限り農道を進む。ダウニングさんと息子さんは、「必要なら私たちは車椅子で行きますよ」。しかしダウニングさんが捕えられた竹藪わきの農具小屋あたりまで行くのは、車椅子には無理なぬかるみ状況と判断せざるを得ない。墜落地点をのぞむ車中で報道陣の質問に答えた。「いまは平和ですね、平和はいいですね」と言う記者に、ダウニングさんは強く頷いた。



墜落地点

3人のうち Thomas Plunkett トマス・プランケットさん、Vity Karfell ヴィティ・カーフェルさんの遺体が仮埋葬された安養寺に車は向かう。元の住職・一島正真氏が英語で3名の仏式供養をすることを告げ、メッセージをされる間、仏前では子息の住職が読経をされる。ダウニングさん父子は、戸外からこれに参加し、ダウニングさんは両手を組み合わせ、深く祈るような表情。寒風のなか、お2人が車を降り、祈りに参加して下さったことに、一島師は感動しておられた。



安養寺



外から祈るダウニングさん父子



読経する現住職

車に戻り、いまどういう気持ちをかかれ、「I feel good now. Concerned everything, I'm all right.いまはとても落ち着いた気持ちだ。気がかりだったすべてを考えてみて、いまはもう大丈夫だ」。

この後、市民活動支援センターで新井勲さんがパワー・ポイントを上映しつつ講演。圧巻はパイロット山田友橘元軍曹の板倉現市長によるインタビュー。「突然、B29 が頭上にいることに気づきエンジンを狙って撃った」。落ち着いた口調で静かに語る山田さんは、4年前に亡くなった。娘さんが新井さんとの電話で「父は謙虚なひとでした」と言われたという。笑顔のよい方だが、ダウニングさんに映像はおぼろにしか見えず、パイロット発見の事実もあまりのサプライズでよく理解できていない模様だと息子さん。



中里さんと握手するダウニングさん
(新井勲氏提供)

現在、ダウニングさんの視力は霞がかかり、景色もひとの顔も、ビデオの映像も、さだかには見えない。しかし、断固とした意思で来日。車椅子に座り、忍耐強い。村人に発見されて捕えられ木に縛られた。目撃した村人たちの話を聞き集めた新井さんが、「木に縛られた」ダウニングさんと、「祖父が結縁寺池近くにパラシュート降下したひとりを木に縛った」という中里さんを引き合わせたのは、印西市庁舎でのビデオ上映後、市民

との交流会である。この墜落では、尾翼の落ちた付近にいたひとりの村人が爆風で吹き飛ばされて命を失い、日本側にもひとりの死者が出た。「One Japanese died.」ダウニングさんは墜落地点で仰っていた。その息子の斎藤弥五郎さん（92歳）も温かい笑みを浮かべて出席し、ダウニングさん父子と会うと「あなたは僕の大切な友人です」とダウニングさん。東京から休暇で帰省していて、英語ができたため村役場に呼ばれ、副操縦士 Robert Fink さんと会った、当時は学生の岡田裕之氏（法政大学名誉教授・日本戦没学生記念会会員）も出席。



「殺せなどと息巻く村人もいて、騒然。村には合法的な確固たる方針がなく、それにはいまでも怒りを覚える。時計を強奪したというのでこれは返却させた」。残念ながらフィンクさんは2年前に亡くなった。新井さんによると、1953年、畑からカーフェルさんのハイスクールのプレスレットが見つかり、故郷の母上に返却された。The Brooklyn Daily 紙に掲載されたその記事を千葉中央図書館の小森さんが発見してくれたそうだ。

ダウニングさんは印西市から仲間4人とトラックで移送されて、大手町の堀端にあった東京憲兵隊司令部で5月26日から8月15日まで、木造のHorse Stable（馬小屋）の6畳より少し大きいくらいの房に、18人で入れられた。傷の手当てもなく2名はゆっくりと苦しみつつ死んでいった。拷問と尋問で絶えざる恐怖とホームシックに直面していた。8月15日に東京湾で水浴びさせられるまで、シャワーもなし。この日移された大森収容所では互いに話すこともでき、29日に病院船ベネヴォレンス号に移された。同じ病室の高部ベッドにダウニングさん、一番下のベッドに墜落王ポイントン少佐がいたという。個人的に話したことはなく、ポイントンは空路、ダウニングさんはマニラから船で帰国した。しばらくワシントン州のマディガン陸軍病院を出たり入ったりして回復。ダウニングさんはなお軍務にとどまった。

1947年4月、日本へ行く命令を受け、現在は海上自衛隊下総航空基地となっている白井米空軍基地に勤務。まもなくBC級戦犯裁判への協力を頼まれ、墜落地点にも立った。新井さんがその時のGHQ撮影写真を紹介する。現場に残された残骸の翼の上に立つダウニングさん、灌木の向うの自分の捕まった地点を指すダウニングさん。横浜法廷で東京憲兵隊司令部での体験も証言した。日本にいる間に除隊、1948年の初秋、故郷へ帰った。帰国後は、兄たち二人と建設業に従事した。結婚64年のビツイー夫人との間に息子ひとり。孫は3人おり、2歳の双子のひ孫がいる。1986年にはビツイー夫人と、1996年には息子スチュワートさんと来日。憲兵隊司令部に近いパレス・ホテルに投宿。息子によれば「二日たったら、父の記憶がよみがえったんだ」ということで、二人は憲兵隊跡地に立ったという。

甲高くて、震え気味な声は聴きとるのに集中を要するが、ダウニングさんのメッセージは明快である。「過去は終わった。ぼくには赦すことは何もない。いまは平和の時代だ。感謝している」。

<http://www.timesherald.com/general-news/20151211/nothing-to-forgive-us-pow-returns-to-japan-to-the-site-of-downed-plane> スチュワートさんは「父はとうの昔に赦している。戦後日本の前向きな歩みに敬意を表する。私たちも歴史を覚え忘れることなく、しかし、前向きに受け止めて進みます」と語った。

(Scott Downing, Donald Ryan 両氏捕虜プロフィールはMindi Kotler 資料による。)